

辞典史

資料による中日大辞典編纂所の歴史 7

今泉潤太郎

中国との絆

「それは数奇をきわめた辞典であった。はじめ中国は上海の同文書院に呱呱の声をあげ、十数年にして終戦とともに中国に接収された。書院の教授たちは、おそらく永久に日の目をみないものとおもわれたにちがいない。戦後十年にちかく、その膨大な資料が中国から返還された。そだての親たちのうれしさは想像にあまりある。それよりさらに十年、日本は豊橋の愛知大学で根本的な検討と整理がくわえられ、いまようやく刊行されようとしている。それは実に、日中両国民の心血がそそがれていた。

日中両国は、いわゆる一衣帯水のあいだにありながら、言語系統のまったくちがった民族である。しかも、日本は中国の漢字を吸収し、もっぱら漢字によって意思をつたえようとして、中国の言語そのものに肉薄することをおこたった。こうして中国語の研究はおくれ、中国語の辞典が本格化したのは、きわめて最近のことにすぎない。自然、この辞典のごとき膨大なものは、まだあらわれていない。いまやその刊行によって、中国の古今東西にわたるおびただしい語彙は、きわめて容易に検索することができ、日本の中国語研究に一大利便をくわえることになった。

おもえば、この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在して数奇な運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使節たる資格を賦与される所以となった。前後三十余年にわたる編集各位の努力にたいし、こころからなる敬

意をささげたいとおもう。」

これは初版発売（昭和42年）にあたり寄せられた倉石武四郎東京大学名誉教授の“日中文化交流の使節”と題する推薦文である。

辞典カードの返還申請から返還、辞典の編集と刊行、贈呈、辞典座談会開催にいたる全過程が日中文化交流そのものである。とりわけ同文書院（カードの作成）廃校から戦後の愛大創立（カードの申請）の時期は中華民国（カードの接收）から中華人民共和国（カードの返還）への大変革期と重なった。そのさなかにカードと密接に関わったのが郭沫若、鄭振鐸、康大川、馮乃超、李何林の各氏であり、そのおかげで“日中文化交流の使節”としての『中日大辭典』が誕生したと言っても過言ではない。

中国との絆と題して、各氏の略歴を付しあらためて辞典との関係をあきらかにしておく。

郭沫若

1892（清光緒18）年11月16日生、1978年6月12日没。四川省乐山出身。本名は開貞。沫若の名は、四川すなわち大渡河、岷江、沱江、嘉陵江のうち大渡河の古名沫水の沫と岷江の支流賀河の古名若水に由来する。詩人、作家、文学者、歴史学者、甲骨（文字）学者にして政治家。行、草書に優れた書家。文学作品、学術研究書などの著書多数。

1912（大正2）年末に来日し中国人留学生のため開設された第一高等学校予科で日本語を学ぶ。岡山の第六高等学校から九州帝大医科へ進むが、六高時代に知りあった成仿吾や東京で留学中の張資平、郁達夫らと交わり、1922年に文学団体創造社を結成し活発な文学活動をおこした。1926年国民革命軍の北伐に参加し政治部宣伝科長兼副主任として活躍したが、蒋介石の反共クーデターの後日本に亡命した。

在日中は中国古代社会や甲骨文字などの研究に専念し『中国史稿』、『甲骨文字研究』などの学術論文を発表、中央研究院院士となる。1937年日中戦争が始まると帰国し国民政府軍事委員会政治部第三庁主任として活躍し、

1941年重慶で郭の功績を讃えて開催された大会では周恩来から“新文化運動の主将”と讃えられた。その後、蒋介石の独裁に反対して職を辞し、政治活動から距離をおき、主に文筆活動を通して反蒋抗日運動を展開した。歴史劇『屈原』や哲学書『十批判書』を発表し活発な著作活動をおこなった。

1949年新中国成立後は中国科学院初代院長、中国文学芸術界聯合会主席、全国政治協商會議副主席、中国人民保衛世界和平委員会主席、中国日本友好協会名誉会長などを歴任し、中国の文化、学術界を代表する人物として、とくに国交断絶中においては日中民間外交の中国側の窓口となった。

辞典との関係では、昭和24年カード返還を要請した相手が中国科学院院長の肩書をもつ郭沫若氏であったこと、同32年中国学術代表団団長として来日の際に愛大訪問の要請をうけ馮乃超副団長を代理として派遣し辞典編纂を励ましたこと、また同33年鈴木が愛知県平和代表団副団長として訪中のさい郭氏と会見し辞典編纂の進捗について報告したこと、また同41年日中友好市長訪中団団長の本学理事河合陸郎豊橋市長と会見したさい「激濁揚清」の書を揮毫し辞典編纂所を激励されたこと、同43年『中日大辞典』が誕生し中国日本友好協会及び郭沫若名誉会長に贈呈されたこと、同48年南開大学の辞典座談会の開催に尽力し辞典関係者と懇談したことなどが特筆される（編纂所の歴史2）。

鄭振鐸

1898（清光緒24）年12月19日生、1958年10月17没。浙江省永嘉県出身。訓詁学者、国文学者、作家、蔵書家。筆名は西諦。詩集、短編小説集や『插图本中国文学史』、『中国俗文学史』など多数の学術著作がある。

北京の鉄路管理伝習所で学び五四運動に参加、瞿秋白と文学雑誌『新社会』を出す。1920年に茅盾、胡愈志らと文学研究会を結成し、のちに彼らと上海商務印書館編輯の職につき、雑誌『小説月報』を担当し文学運動をおこなった。また上海大学、燕京大学、清華大学などで教鞭をとり社会運動に参加したが、1927年蒋介石の反共クーデター後に渡欧し、英、仏などで中

国の古典文学、俗文学などの研究、著述に没頭した。1931年満洲事変後に帰国し上海商務印書館編輯の職に復帰して『魯迅全集』などを編集出版し、ふたたび燕京大学、清華大学などで教鞭をとった。

1937年日中戦争が起こると胡愈志らと上海文化界抗日救亡協會をたちあげ抗日救国、反国民党独裁の運動を展開した。また戦火による善本の流失を防ぐため文献保存同志会をつくり図書の買い上げを政府に迫り実現させた。日本敗戦前後には『民主』、『文芸復興』などの雑誌を発行し、許広平、周建人、李健吾らとともに上海文芸界の代表的人物として活発に平和、民主化運動を展開した。1949年新中国成立後は人民政府国家文物局長兼文化部副部長となり中国科学院考古研究所長を兼任し手腕をふるったが、1958年中国文化代表团長として中東訪問の途中に飛行機事故で落命した。

辞典との関係は、敗戦後南京上海地区における日本の学術文化機関所蔵図書接收の専門委員として同文書院へ赴いたことから始まった。辞典カードの接收に立ち会った鈴木は鄭振鐸に対し「もし事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させてもらいたい」と口頭で申し入れた（編纂所の歴史3、4）。鈴木のこの一言が後にカードの返還を実現させ、ひいては辞典の誕生を可能としたのである。

これ以降のカードに関しての公的見解は「中華民国国立編訳館に接收され……解放後我が国の人民政府に接收された」、「カードの件について私たちは各方面をさがしすでに関係部門の協力によりさがしだすことができた」ときわめて簡単であり漠然としたものである（編纂所の歴史2）。

ここで国立編訳館と上海商務印書館について説明する。国立編訳館は1932年中華民国政府教育部が南京に設置した機関で、当初は文化学術書の編集並びに翻訳を目的とした。しかし業務はしだいに科学技術用語、化学名詞の統一、命名とその用語集および検定教科書などの編集に絞られた。戦中は重慶に移転したが戦後ふたたび南京に戻り、解放後は人民政府出版総署（署長胡愈志）に吸収された。上述のように胡愈志は鄭の知友である。

上海商務印書館は清末民初に上海で創業した中国屈指の近代的印刷出版会社で、北京に開設された京師大学堂とともに“中国近代文化双子星”と称さ

れた。民国になり新式小、中学校用教科書、『辭源』など各分野の辞書類、また『東方雜誌』、『小説月報』などの雑誌類や各国語翻訳書の編集、印刷、出版など近代中国の文化事業全般を語るのに欠かせぬ存在である。解放後北京に移り上海の2字を除き商務印書館となった。

辞典カードに関する範囲内で国語辞典についても触れておく。民国において漢字の字形、発音、用法の整理統一をおこない、現代口語の国語辞典をつくることは近代国家を形成するための重要課題であった。同館が1936年から1945年にかけて出版した教育部中国大辞典編纂所編『國語辭典』全4巻はこれに沿ったものであったが、国語辞典の名からほど遠い内容であり要望に答えられなかった。

解放後新しい国語辞典を作成すべく出版総署編審局長兼副署長の葉聖陶の提案で1950年新華辞書社が設立され、魏建功（北京大学教授）を社長兼主編として編集が始められた。同時に人民教育出版社（社長葉聖陶）を発足させ、その結果1953年に新華辞書社編、人民教育出版社出版、新華書店発行の『新華字典』が誕生し、最初の口語の小型国語字典（もじ辞典）となった。1956年新華辞書社が中国科学院（現中国社会科学院）語言研究所へ編入された後は同研究所詞典編輯室編、商務印書館出版となり、2020年には第12版を出した。

また国語辞典としては1965年丁声樹主編、語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』（呂叔湘主編の1960年試印本を原本とする）試用本が内部出版され、文化大革命後の1978年同館から正式に出版された。最初の本格的な国語辞典（ことば辞典）として2016年には第7版を出した。さらに1975年新華詞典編纂組編の『新華詞典』が中国最初の総合的国語辞典として商務印書館から出版され、2013年には第4版を出した。

この間のカードの動きは、1945年9月カード接収に鄭の立ち会い、カード国立編訳館が所管。1949年10月人民政府出版総署が所管、カードは上海商務印書館へ移管される。1950年新華辞書社設立、同社でカードを利用。同年末、康によるカード調査。1951年初カードは鄭の手元にあることが判明。1952、53年中国政府における審議、1953年10月愛大からカード返還の

正式要請。1954年4月中国人民保衛世界和平委員会からカード返還の通知。同年9月カードの日本に到着となる（編纂所の歴史2）。

ただ鄭振鐸先生にこの辞典をご覧いただけなかったことはまことに遺憾である。

康大川

1915年生、2004年没。原籍台湾苗栗人。本名は天順。『孟子』の「順天者存、逆天者亡」からの命名を嫌って順の頁を取り去り川、天の横棒を一つ抜いて大、これを逆さにしたという。東京の錦城学園を経て早稲田大学商科を卒業。戦争が始まり帰国し1938年国民政府軍事委員会政治部第3庁文化工作委員会（主任郭沫若）に属し、日本軍兵士への宣伝仕事を担当した。1941年皖南事件後に郭の協力で国民政府軍政部第2捕虜收容所（貴州鎮遠和平村）の主任管理員となり日本軍捕虜の世話をした。その後国民党によって投獄させられたが郭の援助で1946年国共双十協定後に自由を回復し復職、帰国する日本軍捕虜に付き添い上海に出る。解放後は日本語翻訳専門家として外文出版社に勤務し中国翻訳工作者協会理事として活動したが、その後人民政府新聞総署国際新聞局（局長喬冠華）へ転じ日語科長兼人事科長となった。1963年より『人民中国』日本語版編集長となり、後に同社の顧問となる。

康は島田政雄を介して辞典カードと関わった。1946年上海で康は改造日報社の島田ら日本人記者の援助を担当した。同社は敗戦後上海など各地で引き揚げの配船待ちをしている在華邦人に対する平和、民主、軍国主義反対の思想宣伝のため国民党軍第3軍司令湯恩伯によって設立された新聞社で、社長、理事長、主筆などの幹部は共産党員である。『改造日報』のほか『改造週報』、『改造評論』や叢書などを発行し活発な宣伝活動をおこなったが、国民党の反対によって1年で廃刊となり、島田も強制帰国させられた。昭和25年日本中国友好協会結成に参加した島田は文化担当理事として新聞総署国際新聞局の康の協力を得て新中国の出版物著作権問題を解決したことがあった。島田が辞典カードの調査を康に依頼した結果、カードの所在が判明

した。愛大が出した正式な返還要請書の宛先が『人民中国』編集部である理由はここにあった（編纂所の歴史2）。

この間のカードの動きは昭和20年9月カード接收、同24年10月新中国政府樹立、同25年10月日中友好協会設立、本間から内山理事長へカード返還要請打診、同年末島田から康へ調査依頼、昭和25年～27年康による調査結果報告と中国側の審議、返還の内定、昭和28年9月返還要請状の宛先指示、同年10月要請状提出、昭和29年4月カードを日本人民へ贈る旨の通知、同年9月島田が天津で康よりカード受領、日本到着、同年末カード愛大に到着、昭和30年4月華日辞典編纂処開設、編集開始となる。

馮乃超

1901（清光緒27）年10月12日生、1983年1月没。広東省南海県塩歩区秀水郷出身。詩人、作家、文芸評論家。在日華僑の有力者で横浜興中会主幹の馮鏡如の子。1923年名古屋の第八高等学校を卒業、京都帝大で哲学、東京帝大で美学、美学史を専攻した。1926年郭沫若らが組織した創造社の『創造月刊』に詩『幻想的窓』を発表し同社の同人となった。翌年帰国したのち、李初梨らとともに成仿吾を中心とする後期創造社に参加し『創造月刊』を主宰した。また夏衍と芸術劇社を結成し新劇運動をおこし演劇評論をおこなった。芥川龍之介の小説の翻訳などもある。1930年には魯迅、茅盾、郁達夫らと左翼作家連盟を結成した。のち中共中央宣伝部文化工作委員会書記、『紅旗週報』編集者。開戦後1938年国民政府軍事委員会政治部第三庁主任郭沫若の下で対日宣伝工作に従事し、中華全国文芸界抗敵協会を組織し周恩来の下で活躍し国共談判における党代表の顧問となる。1949年人民政府文化教育委員会副秘書長兼人事処処長などを歴任、文教、宣伝のほか人事、紀律、検査などの党務に就いた。人柄は誠実で慎み深く、地位名利に甚だ淡泊であった。地下活動で漢奸（のち名誉回復）とされた潘漢年の入党推薦人の立場を崩さなかったこと、かつて魯迅とともに周揚らのセクト主義を批判した馮雪峰（人民文学出版社社長、『文芸報』編集長）が反右派闘争で失脚

し死後に名誉回復されたことで、馮雪峰に謝罪するよう周揚にいったことなどは、その人柄を如実に伝えている。1950年から中山大学副学長として出身地広東省へ出向した。降格同然の異動であったが周恩来の要請に応え欣然として赴いたという。その後はひろく広東省の文化、教育、学術の指導にあたった。1975年より北京図書館（現中国国家図書館）顧問の地位にあった。

辞典との関係では昭和30年12月郭沫若団長代理として愛知大学を訪問、視察、辞典編纂を激励し“為中日两国文化交流打好坚实的基础”の書を寄せ、愛大と中国との友好往来の鎗矢となった。『馮乃超年譜』によれば「1955年12月25日に帰国、28日には上海に戻ったが、毛主席に訪日報告のため郭沫若とともに広州へ呼ばれた」との記述がある。このとき愛大の辞典編纂に触れたかどうか不明だが、カード返還の最終決定は毛沢東主席がおこなったとする風説を補強する材料の一つかも知れぬ。また同53年6月、全国図書館職員友好の翼訪中団に参加して北京図書館を訪問した本学図書館事務長山下輝夫らが馮顧問と面談した。山下は帰国後『愛知大学通信』に“馮乃超先生に再会”と題して、辞典第2版編纂の進捗状況を報告したとき「鈴木先生はお元気でいらっしゃいますか」との言葉に感動したこと、また「その場で前日に亡くなった郭沫若先生のお悔やみを申し上げられなかったことが悔やまれてならぬ」ことを述べている。

なお辞典第3版の編纂に協力された本学中国語講師の馮愛珠女史は馮乃超先生の姪にあたる。

李何林

1904（清光緒4）年1月31日生、1988年11月9日没。本名竹年。安徽省霍邱県城の出身。文学評論家、現代文学研究者、教育者。1920年阜陽の省立第3師範学校の給費生となり、五四運動の新思想を受け魯迅に心酔する。卒業後南京の東南大学農学部で生物学を専攻、在学中に五三〇運動を経験し、1926年上海で中央政治軍事学校武漢分校に入学、国民革命軍の北伐に参軍し政治部宣伝科に配属された。第1次国共合作崩壊後1927年南昌起義

に参加した。のち郷里にかえるが国民党の追及をうけ、名を変えて魯迅の指導する北京の未名社（出版社）に避難した。1928年には革命文学論争を活発に展開し『中国文芸論戦』、『魯迅論』を編輯、出版した。翌年天津女子師範学院の教師となり、魯迅の『中国小説史略』を講じた。のち太原、済南、北京で教師をしたが、1937年日中戦争が始まると重慶に移り『近二十年中国文芸思潮論』を執筆した。1942年昆明で中華全国文芸界抗敵協会理事となり、聞一多の雲南省中国民主同盟の文芸工作委員会の活動を兼務して活動した。

戦後1946年7月聞一多が国民党のテロに暗殺され上海に戻り解放区へ入ることを画策したが実現せず、同年末に台湾省立編訳館館長許寿裳（魯迅の友人）をたよって上海を離れ台湾へ渡った。日本化された台湾人を国民（中国人）化させるため、台湾省行政長官となった国民党の陳儀の要請によって許寿裳は來台し、同館を拠点に魯迅の思想と作品を学校教育、社会教育の手本にして台湾の新文化運動を展開した。しかし翌年、二二八事件がおり陳儀は解任され編訳館も閉鎖された。さらに許が国民党テロに暗殺されたため李は急ぎ台湾を逃れ、上海、北京、天津、石家荘を経て解放区に入り華北大学の教授となった。新中国成立後は教育部で『中国高校新文学教学大綱』の制定に参加したが、1950年北京師範大学教授となり、1952年から南開大学中文系主任として勤務した。1975年新設の北京魯迅博物館館長兼魯迅研究室主任に転じ博物館の整備と研究室の基礎をうちたて『魯迅手筆稿全集』、『魯迅研究資料』など編集出版した。早期には魯迅を誹謗中傷する勢力とたたかい、晩年には魯迅を神格化し利用する輩とたたかい、生涯を敬仰魯迅、研究魯迅、宣伝魯迅に捧げたと評される。

辞典との関わり合いは南開大学における中日大辞典座談会の主催責任者となったことによるもので、この記録はすでに「編纂所の歴史6」において詳しく述べた。李先生は広州—上海—天津—北京—西安—上海—広州と1、2日間滞在し見学、会見、座談をおえて次へ移動する3週間の全行程をわれわれに随伴された。古希を過ぎた李先生の終始かわらぬ誠実な対応に一同深い感銘をうけた。『李何林先生紀念集』中の年譜1973年の項には「6月南開大

学に来た日本愛知大学訪華代表団を接待す」との記述がある。

資料

7-1 中国との絆

- a 郭沫若 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)
- b 鄭振鐸 (1) (2)
- c 康大川 (1) (2) (3) (4) (5)
- d 馮乃超 (1) (2) (3) (4)
- e 李何林

今泉潤太郎 Imaizumi Juntaro 愛知大学名誉教授 専門：中国語学

7-1 a (1)

中日大辞典生みの親

故郭沫若氏 側面から友好支える

歴史学者にして詩人、劇作家でもあり一流の書家でもあった郭沫若氏は、現代中国最高の文化人であった。と同時に大の知目家として知られている。日本とのつながりは、大正初めの六高留学から。日本の女性と結婚し、いったん帰国したが、蒋介石のクーデターで再び亡命し、千葉県市川市に住むなど、日本とのかかわりは深い。日本文化人との幅広い交遊から、戦後、苦難の道にあつた日中関係を側面から支えてきた。日本そばが大好きで、ザル四枚は食べたという、この巨人の死を、知る人たちは、心から悼んでいる。

「中日大辞典づくりでは、ずいぶんお世話になったのに。惜しい人を亡くしました。」愛知県豊橋市の愛知大学教授らはどういつて肩を落とした。郭氏は同大学が四十三年二月に刊行した中日大辞典の生みの親ともいえる人だ。

もともと、この辞典づくりは、愛知大の「前身」である東亜同文書院の教授らが戦前から準備に取り組んでいたが、敗戦で約十四万枚（約七、八万語）にのぼる資料カードはすべて中国側の手に渡った。

二十八年になって鈴木沢郎教授らが郭氏あてに手紙を出し「辞典づくりのため、資料カードを返してほしい」と申し入れた。これに対し、郭氏は「返還することはできないが、日本人民にプレゼントしましょう」と理解を示し、翌二十九年九月、資料カードは木箱に詰められ、愛知大に送り届けられた。このカードを入手、三十年四月から本格的な辞典編集に着手、画期的な中日大辞典を完成した。

〔注〕朝日新聞夕刊昭和五十三年六月十三日記事。

郭沫若氏の墨跡

鈴 木 沢 郎

偉大な学者、政治家郭沫若氏を失ったことは日中兩國にとつて大きな損失で、郭氏のことを記すにあつて謹んで哀悼の意を表する。

郭氏と愛知大学とが交渉を持ったのは、昭和二十八年七月、中日大辞典原稿の返還を願ひ出たときに始まつた。そのころは日中間の個人通信などは非常に不便なときだつた。それで返還願ひ出の手紙は日中友好協合理事長であつた内山完造氏に依頼、中国科学院長の郭沫若氏あてに託送された。間もなく、調査中との返事があつた。現物の在りかの調査や送還方法等が研究されていたのであろう。この間約一年間ははっきりした通信はなかつた。現物が引き揚げ揚げ船興安丸に託送され、舞鶴港に到着したのは翌二十九年九月であつた。

三十年十二月、郭氏は中国學術視察団長として来日された。この時、郭氏は時間の都合で豊橋へ行けなくなつたとのことで、愛知大学を訪問されたのは副団長の広州中山大学副学長馮乃超氏だつた。

私が初めて郭氏に会つたのは三十三年、愛知県和平代表団の副団長として訪中したときであつた。ちょうど五月一日の労働節、北京・天安門前の祝賀会に招待された。要人が立ち並ぶ天安門回廊の背後の部屋で、各団員が色紙をいただいた。私には「己所不欲勿施於人」という文が書かれていた。この会見は非公式であつたためか通訳がつかなかつたが、郭氏は流暢(りゅうちょう)な日本語で話してくれた。祝賀余興の豪華な火花が上がる直前だつたので会見もあつたが終つたと記憶している。

郭氏を正式訪問したのは、四十八年五月、南開大学の招きで訪中したときであつた。このときはもつぱら中日大辞典検討会のための訪中だつたからである。会見場所は北京の人民大会堂。私たちは大広間から左側の北京庁という部屋に案内された。そこでは郭氏と同席者四、五人が私たちを待つておられた。

私たちの方からは中日大辞典の原稿カードを贈つて下さつた好意を謝し、先方からは中日大辞典千二百冊の寄贈に感謝することであつた。話題は主として中国簡化字のことになり、新簡化漢字はいずれ発表されるだろう、とのことであつた。わたしたちとしては近く辞典の増改訂に入る予定から、これに間に合うよう発表してもらいたいと要望したが、郭氏は「それは請け合ひわけにはいかない」と笑つていた。話題になつた第二次簡化漢字は、今春発表されたので、注文通り間に合うことになつた。

「書」について言えば、郭氏は中国においても有数な能書家である。私の目に触れたものだけでも北京の故宮博物館の北入り口に掲げられている「故宮博物館」の文字は一辺が一メートルもあろうかという雄渾(ゆうこん)な大字、西安の「半坡遺跡博物館」

7-1 a (2)

の文字もすばらしい。

愛知大学の学長室には「激濁揚清」の扁（へん）額が掲げられている。四十一年四月、河合陸郎豊橋市長（当時）が訪中する際、愛知大学は河合市長に郭氏への伝言を依頼した。それは「中日大辞典に対し郭氏の寄せられた好意と協力に対し愛知大学の報告を感謝している。おかげで辞典は近く発刊されるはずである」と感謝と辞典近刊の報告をしたためたものであった。これに対し郭氏は激励の意を含めて「激濁揚清」と墨痕（こん）鮮やかな扁額を河合市長に託して贈って下さった。私はこの意味を「濁ったものの中から清いものを選び出す」と理解している。愛知大学はこのような好意に深く感謝し、扁額は学長室に正のもの、中日大辞典刊行会に複製の副を掲げている。

郭氏は金文、甲骨文の研究においても抜群の業績を残し、甲骨文に関する著書も多い。ただ残念ながら私は郭氏の甲骨文で書かれたものを見たことはない。

（愛知大学名誉教授）

〔注〕昭和五十五年六月十五日 朝日新聞夕刊「きょうのいす」

河合陸郎さんの思い出

本 間 喜 一

河合さんと知りあいになったのは、昭和二十一年、すなわち敗戦の翌年七月の盛夏であった。河合さんは、当時県会議員で毎日、ヨレヨレのズボンと開衿シャツに、鳥打帽子の軽装で、豊橋と名古屋間を往復し、謙遜な、一見自由人の風で気さくであり、他人に愛されるような人徳をそなえもった人であった。そのことは一般市民が市長の名称を、「陸さん」の愛称で呼んでいたことでもうなずけるのである。

愛知大学では、女子短大の父兄会会長や愛大理事の職をお願いしたが、きわめて気軽に快く引きうけていただいた。

愛知大学の中日辞典編纂室の西側の壁には、郭沫若氏（中日友好協会名誉会長）の揮毫による「激濁揚清」の額が掛かっているが、これは河合さんが中国視察の際に、郭さんより委託されて、愛知大学へ持参したものである。河合さんは、豊橋市長時代に全国市長有志団体の団長として中国を視察された時、北京に到着した際に多忙な団長の仕事の余暇をさいて郭さんを訪問し、愛知大学の中日辞典編纂の経過を詳しく報告した所、郭さんはかねて日本に辞典原稿カード十五万枚の送付に尽力された事を想い出し、辞典の完成のなり行きを心配していたので、河合さんの話を聞いてことのほか喜び、すぐさま前記の揮毫をした次第である。

因みに、この辞典は、昭和四十三年完成して、第一版を出したが、朝日、毎日両新聞社は各一千部を購入して中国政府に寄贈した。その編纂の由来は辞典序文に故鈴木沢郎編集委員長の詳しい説明がある。

その後、河合さんの御親切に甘えて色々と御示教を仰いだものだった。

当時、坊間の噂として愛知大学の西側の田原街道は三十二間に広げ、豊橋鉄道を復線にして愛知大学の中を通過するという話があったが、市区改正法によれば、こんな事は朝めし前だといっていた。私は河合さんにたずねた所、彼は一寸考えて、「そんな事はどうな事は、私が（河合さんが）死んだ先の、先の事だ。」といわれ、更に少し考えてから、何かおもいついて、「この間、豊橋鉄道の社長にあったが、『愛知大学の中を、複線にして豊橋鉄道を通す事は、本間が死ななければだめだ。』とこぼしていたよ。」と付言した。

その社長も数年前にもはや死に、本間はいまでも延々馬令を重ねている。これも天命なのだろう。

なお、それから河合さんのお亡くなりになる二か月ほど前、愛知大学創立三十年の記念式典に河合さんが出席なさったので、式後、校庭で立ち話の折りに、「河合さんは、なぜ任期中に市長を止められたのですか？」とたずねると、きわめて抽象的にムニヤ、ムニヤと申されたが、他の人が来たので質問を止めにした。あとになってもっと聞いて

7-1 a (3)

おけばよかったと思う。まことに残念な事である。
市長としての河合さんに点数をつけるとすれば、百点満点を送りたい。心に残る、いい人だった。

Ⅱ口述筆記によるⅡ（愛知大学名誉学長）

〔注〕「河合陸郎伝」一九八二年刊所載。

河合陸郎氏が「激濁揚清」の書を愛大に持参され、辞典室に来た折の話では、俺は他の市長連とは違うぞと中国側に郭氏との面会を申し込んだ。愛知大学へ「激濁揚清」と書いてくれたので、ついでに自分にも一つとたのんだら、快く書いてくれた云々。

河合豊橋市長が訪中の途へ

中日友好協会の招きで二十七日中共を訪問する「日本地方自治友好代表团」の团长、河合陸郎豊橋市長は、二十二日午後三時四十分豊橋駅発の新幹線特急「こだま」で東京へ向かった。二十四日午後一時から東京・平川町の都市センターで一行の長野、上田（長野県）釧路（北海道）宿毛（高知県）の四市長と落ち合つて結団式をし、二十七日午前十時三十分羽田発エールフランス機で香港へ向かい、二十八日から一カ月の予定で中共を訪問する。

新幹線ホームには、地元知名人たち役三百五十人が集まった。豊橋商議所職員の一部恵子さんから河合市長に花束が贈られ、木和田為作市議会議長のおんどで万歳三唱があったあと、河合市長は「川島・周会談のまとめ役のような大きな気持ちで行ってきます」とあいさつして笑わせた。このあと日中友好協会豊橋支部長、小岩井多嘉子女史から、廖承志中日友好協会長と呉德峰中国政法学院長あての手紙が手渡された。

河合市長は「国際的な激動期にある中共の姿を見たい。愛大の『中日辞典』が出版されることも知らせてくる」といつていた。中共では上海、北京など十余都市を訪れ、各地の産業、行政視察をし五月末、帰国する。

注 中日新聞 昭和四十年四月二十三日所載。

7-1 a (5)

北京から河合陸郎豊橋市長の報告

(前略)

愛知大学が目下編纂中の漸く完成をみました中国と日本のいわゆる中国語辞典の編纂の問題がございます。そのことが大きく朝日新聞に取り上げられたので、その朝日新聞記事をもって中国を訪問し、北京でこの中日辞典について特別のお世話をお世話ねがった郭沫若先生にお目にかかる機会をつくって頂き、その新聞をお見せし、先生のお骨折りによって中日大辞典もいよいよ日の目をみることになった旨をお伝えした所、郭先生は非常によろこんで私の手を強くにぎりしめて、それはよかったというようないさつをされ、そのためにわざわざ郭さんは愛知大学へ贈る一首をささげてくれました。これは大事にもって帰り愛知大学へ寄贈するつもりです。

(後略)

〔注〕一九六五年五月三〇日の北京放送。河合陸郎氏は地方自治体友好訪問団の団長として訪中、郭沫若氏を訪問された。文中の一首とは「激濁揚清」の文字。現在、学長室に掲げられている。

郭院長の書が愛大へ

中日辞典の編集を激励 豊橋市長が持ち帰る

郭沫若中国科学院院長からの書が七日、豊橋市町畑町、愛知大学に届けられた。さる四月から訪中していた河合豊橋市長が北京で郭院長に会ったさい、愛大で中日辞典の編集をしている話をしたところ、郭院長が激励の意味をこめて書いてくれた書で同大学では学長室か応接室にかけておくという。

横一頁、縦四十センチの紙に「激濁揚清」と達筆で書いてある。また同大学の中国研究所への資料もいっしょに届けられた。河合市長の話では、郭院長は愛大の中日辞典の編集ぶりを熱心に聞き、さっそく一筆書いてくれたという。ついでに市長あてにも「光明磊落大公無私」と書いてくれた。

なお中日辞典は愛知大学が十年前から編集を進めていたもので、来春出版の予定。現在、出版されている辞典の二倍以上の単語を納めた本格的な辞典といわれる。中共へ約千部は贈りたいという。

注 中日新聞 昭和四十年六月八日所載。

7-1 a (7)

激濁揚清

今泉潤太郎

中日大辞典編纂所の壁に雄渾な筆による「激濁揚清」の額がかけてある。

一九六五年に中国を訪問された本学理事の河合陸郎氏（当時、豊橋市長で、日本地方自治友好代表団団長として訪中、昨年暮逝去さる）に託されて、上梓を目前にした中日大辞典のため、愛知大学のために、郭沫若氏が書いて下さったものである。

翌翌年出版された中日大辞典は、言うまでもなく、戦前、東亜同文書院において進捗中であった中国語辞典編輯の成果（粗資料カード約十四万枚）を受継ぐも、この間、敗戦、愛知大学の創立、中華人民共和国の成立など大きく変化した状況の下に、全く新しい構想と企画により、愛知大学が多大の困難を排して遂に完成させたものである（中日大辞典「編者のことば」に詳しい）。

一九五四年に日中文化交流のため改めて日本人民に贈られた前記のカード、数次、提供を受けた多数の貴重な文献、訪日された中国代表団の方々の愛大訪問による励まし等辞典編輯の全期間にわたり、様々な援助と激励をいただいた。また、出版後、招請を受けた愛知大学学術訪中団は、南開大学、北京大学、復旦大学において辞典についての座談会をもち、貴重な助言をいただいた。これらはすべて中国科学院院長の要職にある郭氏の御配慮が与って力であったことであり、深く感謝するものである。

さて、この熟語は、ふつう、悪をにくみ善をほめはやすの意に用いる。いま「濁ヲ激シテ清ヲ揚グ」の文字どうりに、これを辞典編輯にあてはめて考えてみれば、即ち、中国語の複雑な様相と急激な変化のただなかで、形・音・義の三方面から徹底的な検討と批判を加え、その規範的な姿を浮き上がらせることと解せられる。中国語辞典の編輯という大事業を進めてきた愛知大学のために、まことにふさわしい言葉のように思う。

いささか視点をかえてこの語をみてみたい。郭氏がこれを書いて下さった翌年、今日では衆知となった数数の大事件に彩られる文化大革命が始まったのである。郭氏は著名な文字学者、歴史学者であり、文学史上、魯迅とならぶ文字学者であり、また全国人民代表大会副委員長の肩書きをもつ政治家でもある。もとより、このような郭氏にあつても、文革のその後の展開を予想されていたかどうかは知るよしもない。ただ、中国の当時の情勢を背景に入れて考えてみると、「激濁揚清」という語が一層深い意味をもつてくるように思える。

卒業生の親睦を図り、母校の発展に寄与する目的で設立された同窓会は、今や四万の会員を擁し、年年二千人の新会員を迎える大きな存在となった。創立以来三十年を経た愛知大学が、いま将来の発展を期す上で極めて大切な時期にあるのと同じく、同窓会もそのありかたが大きく問われる時期に在る。ともに「濁ヲ激シテ清ヲ揚グ」ねばならぬ状況が到来しているようである。

7-1 a (7)

辞典の増改訂作業が始まり、漢字相手に気の抜けない時を過すことが多くなる折から、ふと、壁にかかる「激濁揚清」に目がいき、見るともなく眺めていると、数年前、人民大会堂で親しくお目にかかった折の郭沫若氏の面影がおもいだされてくる。

(教養部教授中国語担当)

〔注〕愛知大学同窓会会報 第四十六号(昭和五十二年十一月一日発行)所載。

7-1 b(1)

書物を焼くの記事

鄭 振 鐸

まず、勝利後一年間の情勢を、ふりかえってみよう。

西部地区から、東南に、華北に、華南にと、軍隊・官吏たちが、一群、一群、勝利とともに飛行機でかえってきた。まごころをこめて、かれらを熱烈に歓迎したのは、一般市民たちであった。裏面の矛盾や衝突などは、一般のものには想像もつかなかった。なんとといっても、物価はさがるだろう、敵とカイライのひどい政治もなくなるはずだ、もうこれからは大丈夫だ、と、みんながよろこんだのだ。おもえばヌカよろこびに暮れた一カ月であった。

心いさんで「正義の軍隊」を出、むかえた結果といえ、混乱きわまりない事態を、つぎつぎに見せつけられたことであった。接収がひきおこす混乱は、形容もできないほどひどいし、傍若無人な漢奸どもの跳梁も、あとをたたない。人民たちの一時に灼熱したまごころは、しだいにさめていった。あるときは党の機関が接収するかとおもえば、あるときは陸軍総部が統一的に接収するという。そうかとおもうと、いつのまにか、「敵偽財産処理局」という機関が設立される。ただめちやくちやに、あちこち封印してあるくだけだ。しかも、封印してあるく人間がある一方、おなじ工場に、建物に、自由自在に出入する人間もいるのである。なかでも、多数接収された倉庫については、これがどう処分されたのか、その事情をしるものは、一般のものにはほとんどない。どこでも接収されたたん、工場は煙突から煙がでなくなる。機関・団体では、いつさいの機能がみんな停止してしまう。さまざま悪税についても、免除されるといわれていたのが、まもなく、また、もとにもどってしまう、という状態であった。しばらくたってみると、いろいろな現象は、敵とカイライの時代よりも、もつと乱雑で秩序がなくなつたようにみえてきた。人民たちの苦痛は、一向にとりのぞかれない。それに、物価がものすごいいきおいで上りはじめた。ホツと一息ついたばかりの民衆たちは、ふたたび眉をしかめ、災難がちかづいてきた、と感ずるようになった。幾百千万の戦災者たちは、家にかえりたくても、かえるすべがなかった。かれらは、戦時中とおなじように流離の生活をつつけているのに、だれも、かれらをかまうものはいない。

最初に「接収」の一団がついたあと、ついで憲兵隊が来、それから、多くの名も知らない地下工作員と称するものがかえってきた。かれらは封印してある物資を、うばいとつた。

〔注〕鄭振鐸「書物を焼くの記事」(一九五四年岩波新書)より抜粋。

郑振铎日记

一九四五年

九月十日

“晨，森玉来，偕出访慰堂，遇之扬子饭店。谈甚畅。教部以‘京沪区教育复员辅导委员’名义予我，似觉无聊。”当时，教育部派蒋复璁（慰堂）为京沪特派员，在上海设办事处，组织“京沪区教育复员辅导委员会”，由蒋复璁兼主任委员，聘马叙伦、张凤举、许炳堃、郑振铎、刘英士、徐鸿宝（森玉）、叶风虎等为委员，研讨有关教育复员问题，备供参考。但不久，国民党加强控制，该委员会名存实亡。

九月十八日

“八时许，至凤举处，皆至同文书院视察”，“三时许，至办公室，正在举行接受自然科学研究所会议。”

九月二十日

“晨出，至办公处，至同文书院接收，经过情形甚好，惟资料室已空，大是可惜”，“下午，至自然科学研究所视察，又至近代科学图书馆等处，均重门锁闭，无法入内。”

〔注〕書目文献出版社「鄭振鐸日記」より同文書院接收關係事項抜粹。

7-1 c (1)

東亜同文書院大学と『中日大辞典』

一九五〇年頃、もう一件、島田政雄さんから懇願されていたことがある。それは、日本の敗戦とともに廃校になった上海の東亜同文書院大学が、中日辞典を編纂するため何年もかかって蒐集していた「中国語カード」をなんとか探し出し、日本に返却してほしいとのことであった。この大学の資産や所蔵図書は国民政府に接收され、「中国語カード」も国外持出は許可されなかったという。

私は郭沫若さんに相談し、カードがどこに保管されているか調べて回った。接收した機関は国民政府教育部京滬区特派員弁公処で、そのトップが蔣復璁、次官が鄭振鐸。人、民中国誕生後もカードを保管していたのは、『書物を焼くの記事』（一九五四年、岩波新書）を書いた作家の鄭振鐸だった。鄭は新中国誕生後は文化部副部長になっていた。……「困ったな」と思った。

鄭振鐸との交渉に尽力してくれたのは、このときも姚蓬子だった。彼は国民党関係者に顔が広がったから。

私は返還について意見を求められるごとに「中国語を理解する日本人がもつと増えれば、これからの両国の交流に多大な貢献となる。良い辞典は語学学習に必須だ。だから返した方がよい」と主張したが、関係者の間には「カードは返さずに、中国の商務印書館から辞典を出版してしまおう」との意見も存在し、返還手続きは難航した。最終的な政治判断を下したのは、国際新聞局長・喬冠華だ。彼が許可し、日本に返却することが正式に決定した。一九五四年秋、カードは木箱に梱包して、邦人引揚船の興安丸に積載し、日本に向かった。話を持ち込まれてから返還まで、実に四年の歳月を費やした。大分経ってから、返還した「中国語カード」をもとに愛知大学が編集し、出版した『中日大辞典』が私宛に送られてきた。嬉しかった。

〔注〕水谷尚子「康大川回想録」六、中華人民共和国の成立（続）。「東方」NO.291（東方書店）所載。

康大川さんのこと

そのために日本に関する情報や資料が必要です。そこで日中間で資料の相互交換を最初に始めたのが康大川さんらです。その後、その仕事は中連部に回り、ぼくが康さんの資料交換の仕事を引き受けることになりました。康さんはのちにぼくらと『毛沢東選書』の編訳委員会にも参加しています。

康大川氏とは昨年九月と年末年始の北京でのインタビューでお会いした。彼は重慶国民政府の郭沫若の下で鹿地亘に協力して日本軍兵士の捕虜管理の仕事をしていた人である。戦後、共産党系の新四軍に入り解放戦争を戦った。新中国成立後、国際新聞局（局長は後に外務大臣になった喬冠華）に呼ばれて北京に来て、中共の宣伝部の仕事をするかたわら、当時非合法だった日本との新聞雑誌の交換などに努力した。康氏のお話では、一九五一年にこの仕事を趙氏に引き継いだという。またこれに協力した日本側の人物は島田政雄、小沢正元、赤津益造氏らである。

〔注〕雑誌「世界」一九九八年十月号所載「趙安博回想録」（姫田光義・水谷尚子）による。趙氏は留日学生の一。抗日戦争中は延安の日本人労働学校の副校長を務めた。

7-1 c (3)

鈴木先生

日本に滞在中は色々とお世話様になり、此の夏は又「中部日本」の鈴木先生に託し、御丁寧なるお手紙を拝取したにもかかわらず、今日まで御無沙汰に打ち過ぎて誠に済みません。

御入用の字典編集用資料は早速「対外文化協会」へ連絡し、御希望に添えるよう鋭意準備中と思いますが、私も方々当たって見、友人の斡旋で「語文」雑誌のバックナンバ―を入手しましたので、日中友好の能智先生の吉便に託してお届けしましたから既にお受取りのほどと思います。

字典の編集は順調に進捗中と思いますが……
ではお知らせまでに……

敬具

愛知大学の皆様によろしく

康大川 敬上

(一九五五年) 十月二四日

〔注〕鈴木教授宛 康大川「人民中国」編集長の書信。鈴木先生とは中日新聞社鈴木充氏。能智先生とは日本中国友好協会理事能智修弥氏。

7-1 c (4)

康大川先生

前蒙惠贈，交能智先生帶回的「中国語文」，有一个时期莫明它的下落，经能知先生悉心调查，才明白它混在歌舞伎演员团的行李里面，由歌舞伎团送交中国研究所收藏，现在已经由能智先生收回，再转交我们了。我这儿对您表示深切的谢意。

再者，该「中国語文」是从创刊号起，以至于第三年十二月号共三全年份。其中大部分是敝处所缺，而且现在是绝对买不到的贵重文献，我们翻在手中，真觉得又感谢又高兴！敬祝健康！

爱知大学华日辞典编纂处

铃木 择郎

一九五六・四・一六

訳文

能智先生に託されお贈り下さった「中国語文」は、暫時所在が不明となっておりました所、能智先生のご苦心により歌舞伎団員の荷物に混入し、そこから中国研究所へ送られていることが判明いたし、この程当方に到着いたしました。まことに有り難く厚く御礼申し上げます。

さて、この「中国語文」創刊号から第三年十二月号まで全冊揃いであり、当編纂処の欠号はこれで全て充足いたしました。現在となつては絶対に購入できない重要文献であり、まことによるこばしく御礼申し上げます。

〔注〕康大川氏への返信。

7-1 c (5)

鈴木擇郎先生：

「人民中国」日文版編輯部康大川先生转来您一九五五年七月十八日写给他的信，并委托我们供给您在编辑华日辞典时所需的各项参考资料。

我们在一月中旬已初步寄赠您下列资料（一）「中国语文」（二）「十五期」，（二）「北京口语语法」，（三）「同音字典」，（四）「常用汉字三五〇〇字表」，（五）「简明字汇」；至于其他资料，我们还在继续蒐集中，俟蒐集齐后，当另邮寄上。

此致

友谊的问候

中国人民对外文化协会

资料交换处

一九五六年二月十六日

訳文

「人民中国」日文版編輯部康大川先生からこの程華日辞典編輯の為に必要な参考資料が欲しい旨の一九五五年七月十八日付貴信が転送されました。

当会は一月中旬から（一）「中国語文」（二）「十五期」、（二）「北京口语语法」、（三）「同音字典」、（四）「常用漢字三五〇〇字表」、（五）「簡明字彙」を順次お贈りしております。その他の資料も引続き探しており、集まり次第郵送いたします。

〔注〕鈴木教授宛 中国对外文化協会の書信。

中国視察団馮氏来学

日本学術会議の招きに応じて郭沫若氏を団長とする中国学術視察団が来日した。そこで中国に関する学術研究、文化、交流を持つ本学は、一行を招くため骨折られて来たが、遂に一行のうち副団長、広州中山大学副校長馮乃超（ひょうだいちよう）が招請を承諾された。馮氏は八日午後来豊され市民の歓迎を受けた、翌九日は朝から本学をおとずれ、華日辞典の編集状況など見学した。

馮乃超氏は八日午後四時三十四分豊橋駅着特急「ハト」で来豊し、出迎への本学わだつみ会、中国研究会員らの合唱する中国々歌に迎えられて下車、市民代表の花束贈呈後駅長室での記者会見では「日中両国が一日も早く国交を回復し自由に行き来することを望みます」とステートメントを述べた。

馮氏の来豊は戦前戦後を通じて今度が初めてであるが愛知県は馮氏が第八高等学校（名大）の出身である関係から切っても切れないなじみ深い地である。

馮氏の歓迎会は午後五時十五分市民館で盛大に開催、日中学術の交流、貿易促進が叫ばれている折心から日中国交の回復を願っている学生、一般人によつて同会場は国際親善の空気に満ちあふれた。

同会は日中友好協会理事長伊藤武雄氏（本学講師）の挨拶から始まり会場一杯に埋め尽くした参会者を前にして馮氏は「両国の平和建設その有意を大切にし色々な方面にし隣国人民のお互の気持を深く理解して行こう」と国交回復の必要の意を示した。次いで小岩井本学学長、日中友好協会豊橋支部長鈴木本学教授、市民代表早川氏、本学自治委員長及部若等の歓迎の祝詞を受けられ、両国の交友、発展を祝した堅い握手がかわされた。翌九日朝、馮氏は本学図書館、研究室を視察し、九時半より学生歓迎会に臨むため学内八番教室に向つた。伊藤氏の紹介に続いて、万歳の拍手をあげた馮氏は次のように語った。

皆様の盛大な歓迎を心から感謝します。豊橋に着いたとき意外に思ったことは豊橋市民の皆様が新中国を理解し、友情が非常に深いという印象で、この学校の校長、教授、学生方の非常な団結、活潑な校風からもうかがわれる。このような学校は日本にもそうないと思う。学校は校舎によつて定まるものでなく、それが良い悪いでその標準が決定するものではない。愛大は現在の日本の現状にふさわしく仕事、勉強に現在の世界に連関をもつて結ばれていると思う。このような学校は次の時代の人材を養成させ、この学校の特徴として今日現われてきたと思う。この愛大の存在によつて、豊橋市民、学生がどのように中国に関心をもつておられることを中国人民に報告したいと思います。図書館、研究室等をみせて頂いてしかもここで日華辞典をつくるという文化交流の仕事をやっておられることは中国人民にとってはみがせないことである。そしてあらゆる方法を

7-1 d(1)

つくして援助したいし、又学生交換にも今後大いに努力したいと思えます。

〔注〕 愛知大学新聞 昭和三十年十二月十五日所載。

中国學術視察団の馮氏 きょう愛大を視察

【豊橋発】来日中の中国學術視察団の首席団員馮乃超氏（広州中山大学学長）は、愛知大学視察のため案内役の日中友好協会伊藤武雄理事長とともに八日午後四時三十四分豊橋駅着の特急「はと」で着いた。

ホームで歓迎の愛大生らが合唱する中国国歌に迎えられて下車した馮氏は、まず出迎への小岩井愛大学長と握手し、市民代表牛込京子さん（二四）から贈られた花束を受け、同駅長室で記者団と会見したのち、同市民館での歓迎会に臨んだ。

歓迎会では会場を埋めた参会者を前に馮氏は二千年も結ばれている日中友好のキズナをますます固めるよう」とあいさつし、小岩井学長、日中友好協会豊橋支部長鈴木愛大教授、市民代表早川延海氏、片山豊橋教育委員長らの歓迎の言葉を受けた。

続いて同会で馮氏を囲んで懇談会が開かれ、同夜は蒲郡ホテルで一泊した。九日は朝九時から愛知大学を視察、かつて郭沫若氏の好意で同大学に贈られた華日字典の編集ぶりを見たのち名古屋へ向い、名古屋大学主催の歓迎会に臨み、午後二時五十分名古屋駅発の特急「つばめ」で郭団長らと合流、京都へ向う予定。

馮乃超氏談 私は大正十年から十二年まで名古屋の旧第八高等学校に在学したことがあり、愛知県は懐しい土地だ。豊橋ははじめてだが、愛知大学のことは華日字典の編集を通じて聞いていた。

注 朝日新聞 昭和三十年十二月九日所載。

“愛大の友好活動に敬意”

中国學術
視察団 馮首席団員が豊橋へ

【豊橋発】中国學術視察団の首席団員馮乃超氏は、八日午後四時三十四分、豊橋駅着“はと”で来豊した。駅ホームには招待者の小岩井愛大大学長をはじめ各教授、片山豊橋市教委長らのほか、歓迎のプラカードを掲げた愛大生数百名がためかけ、新中国の国歌を合唱して出迎えた。黒のオーバーに紺のダブルという英国紳士型の馮氏はにこやかに降りたち、豊橋真田工業常務牛込憲三氏令嬢京子さん（二三）から花束が贈られた。ついで駅長室で記者団と会見。“日本と中国がなるべく早く国交を回復し、自由に往来できるようにしたい。その意味で、両国の文化交流に積極的な活動を行っている愛知大学に敬意をもっている。私は大正十年から三年間名古屋の八高に学んだから豊橋は懐しい”と語った。

同五時から駅前公民館での歓迎会に臨み、“日本と中国は二千年来の友達で、戦争はあったが、その友情は中断されなかつたと信じている”とあいさつした。引続き同所で歓迎代表者らと約一時間懇談、同夜は蒲郡ホテルで一泊した。なおきよう九日は午前九時から愛知大学を見学、同十時四十分発の名鉄電車で名古屋に向う。

注 中日新聞 昭和三十年十一月九日所載。

市民と和やかに交歓

馮副団長 愛大視察に豊橋へ

【豊橋発】訪日中の中国科学院學術視察団一行のうち副団長馮乃超氏は伊藤日中友好協会理事長、林見総理府事務官の案内で八日午後四時三十四分豊橋駅着特急「はと」で来豊、駅長室で記者会見を行い「愛知大学は中国から引揚げの先生がおられるということよく知っていた。とくに新しい華日辞典が編さんされていることも聞き大きな期待をもつてやってきた」とのべた。つづいて千余名の学生や市民に取巻かれ豊橋駅前の公民館での歓迎会に臨み「これから日中両国はしっかり手を握りあつて世界平和へ進んでい

7-1 d(1)

きたい」となだらかな日本語であいさつした。小岩井愛大学長らから「こんな片田舎にも日中友好を念願する人々がたくさんいるということを中国の人たちに話してください」と歓迎の言葉があり、午後六時を終った。なお同夜は蒲郡ホテルで一泊、九日午前九時から愛知大学の中国研究諸施設、華日辞典編集状況などを視察したのち、名大差回しの自動車であつての母校名大教養部（旧八高）を訪れる。

注 毎日新聞 昭和三十年十二月九日所載。

“早く日中国交の正常化を”

中国學術
視察團 馮首席團員豊橋で語る

既報、来日中の中国學術視察團の副団長（首席團員）馮乃超（ヒョーダイチョー）氏は愛知大学の招きにより昨八日午後四時三十五分着下り特急ハトで日中友好協会理事伊藤武雄氏に伴われて来豊した。

豊橋駅ホームには小岩井愛大学長をはじめ松葉、鈴木（沢）の教授、台湾から招かれた歐陽張講師ら教授陣のほか片山市教育委員長、日中友好協会豊橋支部の早川延海氏それに韓国居留民団の人々や学生約五十名が出迎え、同ホームで豊城中学二年の牛込京子さんが市代表として馮氏に花束を贈呈、また愛大学生たちは「歓迎」のプラカードを押し立て、中国語の歌を口々に唱つて迎えるなど豊橋駅は一瞬日中兩國の友情でわき立つたが、馮氏は駅長室で記者会見し、たくみな日本語でおよそ次のように語つた。

問 中国學術視察團の一員として、また団長の代理として豊橋に来たところ盛大な歓迎をうけて心から感謝の意を表します。

答 団員全員が来られなかったことを残念に思います、愛大からのお招きもあり、名古屋までそのまゝ通つて行くことは非常に気がすまないと思ひ、是非お会いしたいと思つて来たのです、このむね市民諸君によくお伝え下さい、中日友好関係もだんだんよくなつていくでしょう、よろしく願ひします。

問 日本は何年ぶりですか

答 三十年ぶりぐらいだと思います。

問 日本および日本人にのぞみたいことは？

答 私が日本に来て感ずるのは日本国民が中国人に友好的な態度をもっていることがよくわかりました。要望することといえばなるべく早く国交を正常化し、自由に往来出来るようにしたら非常にいいと思ひます。

問 日本は学界をどうみているか？ 答 まだよくわからないがあらゆる面に深い研究が行われていると思ひます。

問Ⅱ愛知大学について

答Ⅱ中国にいた先生が大ぜいいると聞いている、また華日辞典を編纂しているし中日文化交流のために重要な部分だということを知っている、それで私はその辞典がどのぐらい進んでいるか、そして編纂に従事している方々に敬意を表したいと思つて来たのです。

【註】馮乃超氏は大正十二年名古屋八高を卒業、東京大学文学部哲学科で美学を専攻、卒業寸前に帰国した、現在は広州（広東）の中山大学副学長をつとめている。

なお馮氏は豊橋駅到着後、駅前公民館で開かれた懇談会にのぞみ、蒲郡ホテルに宿泊した、きよう九日は午前中愛知大学を視察し、名古屋へ向う予定。

注 不二タイムス 昭和三十年十二月九日所載。

豊富な中国資料に感嘆

馮副団長 愛大を視察

【豊橋発】既報、中国學術視察団副団長馮乃超氏は九日午前八時四十分愛知大学を訪問、視察した。小岩井学長の案内で史学、国研、図書館、中国図書館などをみて回り、古い漢書から現代中国文獻にいたるまでその豊富な資料に驚きの声をあげたが、とくに華日辞典編さん所では膨大なカードを一つ一つ出して調べ、鈴木編さん委員長に「早く完成したいものです」と語った。特別教室に集った約一千名の学生に

「学長はじめ学生が和やかに団結している非常にいい学校です。愛大のおかげで豊橋も中国と深い関係を持つようになるでしょう。中国研究の意義は大きく私も中国に帰つてこのことを報告し、できる限りの援助をします」

と感想をのべ、同九時四十分学生たちの歌う新中国国歌に送られて名大出迎えの車で名古屋にたつた。

郭氏一行京都へ

郭沫若氏ら中国科学院學術視察団一行十五名は九日午前九時東京発「つばめ」で京都に向かった。同夜はミヤコ・ホテルに泊り、十三日まで大阪、京都を視察する予定。

注 毎日新聞 昭和三十年十二月九日所載。

7-1 d (1)

教授 学生 交流に努力

【豊橋発】蒲郡ホテルで一夜を明かした中国学術視察団の馮乃超氏は九日午前八時四十五分愛知大学を訪れた。学長室で小岩井学長始め各教授と歓談したのち同大学国際問題研究所、中国図書室、華日辞典編纂所、図書館などを視察とくに華日辞典編纂所では主任の鈴木辰郎教授から説明を聞きながらカードを手にとり、なかなか大変な仕事で「すね」と興味深そうだった。ついで八番教室に集った約五百名の学生に対し、「愛大の存在により豊橋市民はほかのどこの都市よりも中国に対する理解と友情をもっているようだ。今後ますます両国の友情を高めるため教授、学生の交流を実施するよう努力したい」とあいさつした。

同九時四十五分、玄関前で数百名の学生が日中親善歌「東京―北京」を合唱するのに手をぶってこたえ、名大差回しの自動車で名古屋へ向った。

注 中部日本新聞 昭和三十年十二月九日（夕刊） 所載。

愛大に來なかつたら

あとで後悔しただらう

来日中の中国学術視察団ヒョウ首席団員は八日来豊、同夜は蒲郡ホテルに一泊、九日午前八時四十分視察のため中日友好協会理事、伊藤武雄氏の案内で愛大を訪れた。小岩井学長、松葉教授らの案内で華日辞典の編さん状況、崑山文庫、中国図書館、国研など全国一を誇る愛大中国関係の図書を細く視察したあと、八番教室で約十分にわたり学生に講演を行い、小岩井学長らに

愛大に来て非常に良かった。中日友好に役立つ華日辞典の編さんや中国関係の図書館を持つ愛大の視察をしなかつたらあとで後悔しただらう

と感想をもらし、同九時四十分教授、学生の盛大な見送りを受けて自動車で名古屋に向った。

注 豊橋新聞 昭和三十年十二月十日所載。

愛大華日辞典編纂処を訪れた馮乃超氏

教授と学生の團結を賞讃

中國學術視察団
副団長馮乃超氏 きこう愛大を視察

既報、八日来豊した中国學術視察団の副団長馮乃超氏（中山大学副校長）は昨九日午前九時蒲郡ホテルから自動車で愛知大学に招かれ学内の図書館、華日辞典編纂処などを視察ののち、八番教室に集つた約八百名の学生に対し「愛大をみて印象深いことは学長をはじめ教授と学生とが非常に團結して活潑に学究を進めていることだ、これは大へんいい校風だと思う、帰国したら中国と關係の深い愛知大学のために出来るだけの協力と援助をしたい」とあいさつした。

馮氏は同大学を挙げての歡迎に終始笑顔をもつて応え、大いに満足の態で約四十五分間の愛大訪問を終り名大さし廻しの自動車で名古屋へ向つた。

注 不二タイムス 昭和三十年十二月十日所載。

華日辞典を視察

【豊橋発】八日愛知大学の招きで豊橋を訪れた中国學術視察団首席団員馮乃超氏は同夜蒲郡ホテルに一泊、九日朝九時から愛知大学を訪れた。

小岩井学長、松葉教授、山崎文学部部長らの案内で学内の国際問題研究所、中国図書館、霞山文庫、愛大図書館、華日辞典編纂所を次々に視察した。

特に華日辞典編纂所では鈴木沢一郎教授、内山正夫専任講師らの編集記録の説明を熱心に聴き、郭沫若氏の好意で同学に贈られた単語カードを手にとつて興味深く見学したが、内山講師からお土産にと編集記録アルバムを贈られた。次いで学生参加の講演会に臨み

「愛知大学が中国研究に熱心であることを見て非常にうれしい。国に帰って中国人民にこのことを伝えたい。また愛大との教授の交換を通じ学問文化の点から日中友好がますます盛んになるよう具体的に研究したい」

7-1 d(1)

と語り、同九時四十分名古屋大学江上不二夫教授の出迎えを受け自動車で名古屋に向い、名大歓迎会に臨んだ。

郭沫若氏ら関西へ

中国科学院術視察団の郭沫若氏らの一行は、ひとまず東京での日程を終え、九日朝九時東京発特急「つばめ」で関西に向った。一行は十日京都の立命館大学で、十一日大阪大学でそれぞれ講演する。

注 朝日新聞 昭和三十年十二月十日所載。

「四つの現代化」の中国を訪問して

図書館事務長 山下 輝夫

馮乃超先生に再会

日程も終りに近づいた六月一六日、我々は国立北京図書館を訪問した。高校生(高級中学)のための閲覧室に当られた交流会場で劉李平館長は顧問馮乃超先生と副館長丁志剛先生を紹介された。「顧問馮乃超先生は、大学卒業まで日本で過ごし、中山大學学長を勤められました」。馮先生は、おだやかにかつ流暢な日本語で歓迎の挨拶をされた。中山大學副学長の職名は、愛知大の三名のメンバーにも記憶があった。「もしかして、国際問題研究所の壁に掛けてある色紙をお書きになった先生では」同行の中山君が言った。休息の時間、私はメインテーブルにおられる先生に近づき、名刺を出し愛知大から来たことを告げご挨拶をした。すると先生は笑みを浮かべ「私は一九五五年に愛知大を訪問し、中日大辞典編纂室をたずねました。その時の先生方は・・・鈴木先生はお元気でいらっしゃいますか。」私は感動した。そして中日大辞典改編作業のこと、鈴木名譽教授がその中心となつて業務に取り組んでいらっしゃることに、又大学は中国政経用語辞典編纂にも取り組んでいることなど一気にお話した。先生は「それは、中日両国人民の友誼と学術文化の交流にとつても意義深いことです。成功を祈っています。お帰りになりましたら皆様によりしくお伝え下さい。」先生は求めに応じてノートに「北京図書館馮乃超」とサインをして下さった。その時私ははつきりと想い出した。私の学生時代、中国学術代表団副団長として本学に来校され、私も学生歓迎委員会の一員として豊橋駅に出迎えたことを。この二十三年ぶりの感動的な再会は私個人にとつてだけでなく、我が愛知大にとつても意義ある事柄に想われたし、この任を果せたことは、身に余る光栄と感じながら、先生に礼をしてメインテーブルを離れた。

この前日の六月十五日、人民日報は馮先生の親しい友人であり、馮先生が訪日された時の代表団長であり、愛知大にとつても係わりの深い中国科学院長郭沫若先生の永眠を報じていた。その場で馮先生におくやみを申し上げられなかったことが、今悔やまれてならない。

中日大辞典のいま

南京図書館蔵書数四七〇万冊・上海図書館蔵書数六五〇万冊・そして北京図書館は九七〇万冊だから、いくら書庫、閲覧室を見学しても、その中から中日大辞典にお目にかかるとは予想もしてなかった。ところが、北京図書館の「工具書(参考図書、閲覧室)」「東編組(東方言語目録編纂)室」、北京大學「文系教員閲覧室」で活用されている中日大辞典にお目にかかった。しかもこれらの部屋で、河北大學日語科教授許淑英先生、東編室の王慶元さん、又後に述べる北京大學日語科教授崔榮林先生から中日大辞典改編について熱心に質問された(出発前に、大辞典の今泉教授、用語辞典の近田さんに取り組み状況をおききしておいたのが役立った)。中国政経用語辞典の編纂事情を含めての

7-1 d(2)

報告に、先生がたから称賛の意が表され、固い握手を交わした。そばにいた中国国際旅行社の通訳さんからも「中日大辞典は、私達の分社にも三冊もあり、大変役立つています」と伝えられた。

〔注〕「愛知大学通信」第十六号（昭和五十三年七月二十日）所載。

中华人民共和国北京市 国立北京图书馆 顾问

冯乃超先生：

今年六月参加日本图书馆友好之翼访华团的我校图书馆职员山下辉夫，中川桂一和中山钦司访问贵图书馆时，幸得面晤先生并承多方指导。我们得知这件事觉得非常高兴。

1955年您任中国学术视察团副团长来时，蒙您特意访问我校，参观了我们的辞典编纂处，这对我们是难忘的感激。我们所编的中日大辞典观在进行修改工作。兹谨奉上一本，务祈赏收，并请批评指教。随函附上四张照片都是山下照的。请您收下做个纪念。现在缔结了日中和平友好条约之际，两国人民的友谊和交流要更加增进。我们愿意通过学术交流对于日中两国的友好有所贡献。我们甚愿以我校校长为团长的友好代表团明年夏季能访问贵国。我校已向中日友协会长廖承志先生提出这个愿望。如蒙您从旁帮忙能实现访华，我校感谢不尽。专此奉慰，即敬祝健康。

爱知大学中日大辞典编纂处

[注] 山下図書館事務長から訪中報告を受けての挨拶。

「冯乃超年谱」

前略

一九五五年 五十五岁

十一月二十七日 应日本学术会议之邀，随以郭沫若为团长的中国访日科学代表团离京转道赴日。任秘书长。

十二月一日 从香港乘飞机抵达日本东京，受到热烈欢迎。次日访问日本学术会议。三日访问东京大学。四日在箱根举行记者招待会。

十二月五日 访问千叶县。

十二月六日 回东京访问日本国会。又应邀出席岩波书店出版的《世界》杂志创刊十周年纪念会。八日应邀访问早稻田大学。与日本老作家秋田雨雀互相题字留念。

十二月九日 往京都参观访问。次日出席在京都大学主办的欢迎宴会。

十二月十二日 到达大阪访问，出席欢迎茶会。次日访奈良东大寺。

十二月十四日 从大阪到冈山县访问。

十二月十五日 从冈山到达广岛访问。

十二月十七日 访问福岡九州大学。

十二月十八日 参观下关市和八幡市。次日由福岡回到东京。

十二月二十二日 出席日中友好协会等三个团体联合举行的欢迎酒会。晚离东京赴下关。又赴爱知县丰桥市爱知大学与教师们座谈，并作题词：“为中日两国文化交流打好坚实的基础。”

十二月二十五日 中国访日科学代表团乘苏联轮船“力牙兹斯克号”离开下关回国。二十八日返回上海，应召与郭沫若同赴杭州向毛泽东主席汇报。后作访问记《友谊的旅程》，载次年二月四日《中山大学周报》第一三七期。

後略

〔注〕「默默的播火者」 2001年9月中山大学出版社「冯乃超诞辰百年纪念文集」中の年譜より抜粋。

訃告

中国共产党优秀党员，无产阶级文化战士，教育家，革命活动家冯乃超同志，因长期患病不幸于一九八三年九月九日十一时十分在北京逝世，终年八十二岁。

冯乃超同志是广东省南海县人，出生于日本横滨，自幼在日本求学。早年在日本东京帝国大学读书时，加入日本共青团外围组织马列主义研究会，一九二七年回国参加革命工作，一九二八年加入中国共产党。

冯乃超同志长期从事党的统一战线工作，组织工作和文化教育工作。他是文艺界早期从事革命活动的共产党员，著名文学团体创造社后期的主要成员；后又与鲁迅等筹组中国左翼作家联盟，起草左联“理论纲领”。第二次国内革命战争期间，冯乃超同志历任创造社编辑，中国左翼作家联盟党员书记，中国左翼文化总同盟党员书记，中共中央机关刊物《红旗报》编辑。抗日战争和解放战争期间，冯乃超同志在周恩来同志和中共中央南方局的直接领导下，广泛团结知识界人士，为党的统一战线和文化宣传做了卓有成效的工作；历任国民政府军事委员会政治部第三厅中共特支书记，中共中央南方局文委委员，重庆国共谈判中共代表团顾问，中共华南分局文委书记。北平解放后，历任华北人民政府教育委员会委员，第一届全国政协委员，中华全国文学艺术工作者代表大会代表资格审查委员会副主任。中华人民共和国成立后，曾担任中央人民政府政务院文化教育委员会副秘书长，中直党委文教分党委书记，中央人事部副部长，中山大学党委第一书记，副校长，中共广东省委委员，中共广东省委高校党委第一书记，北京图书馆顾问。冯乃超同志曾当选为第一届全国人民代表大会代表，中共八大代表，广东省政协副主席，第四届，第五届全国政协委员，第一届，第四届中国文联全国委员会委员。

冯乃超同志是我党久经考验的共产主义老战士。大革命失败后，他放弃了在日本东京帝国大学的毕业考试，毅然回国参加革命工作，热诚投身于各个历史时期革命需要的工作。在十年动乱中，他备受迫害而坚强不屈，坚决抵制和反对“左”的错误路线。五十多年来，冯乃超同志始终以党的利益为重，忠贞不渝，立场坚定，正直无私，功成不居，埋头苦干，认真负责，表现了一个共产党员的优秀品格。他在长期的革命斗争中，认真贯彻党的方针政策，团结同志，兢兢业业，为中国革命事业，文化教育事业做出了重要贡献。

冯乃超同志虽多年患病，但革命意志坚强。他衷心拥护党的三中全会以来的路线、方针、政策，关心国家四化建设事业，直到生命的最后一息。他生前遗言：丧事从简，不开追悼会。特此讣告。

冯乃超同志治丧委员会
一九八三年九月二十日

訃告

中国共産党の優秀な黨員、プロレタリア的文化兵士、教育者、革命活動家である馮乃超同志は長期の病気のため、不幸にして一九八三年九月九日十一時十分在北京で逝去された。享年八十二才である。

馮乃超同志は広東省南海県人で日本の横浜で生まれた。

幼時日本で勉強し若年のころ日本の東京帝国大学在学中に日本共産主義青年団の外郭団体であるマルクス・レーニン主義研究会に入会し、一九二七年に帰国して、革命の仕事に参加し、一九二七年に中国共産党に加入した。

馮乃超同志は長期にわたって、党の統一戦線工作、組織工作与文化教育工作に従事した。彼は文学芸術界で早期の革命活動に従事した共産党員であり、有名な文学団体“創造社”後期の主要のメンバーであった。後にまた魯迅らとともに中国左翼作家連盟の創設を計り、その「理論綱領」を起草した。第二次国内革命戦争の時期に馮乃超同志は創造社の編集者、中国左翼作家連盟の党員書記、中国左翼文化総同盟党員書記、中国共産党中央機関誌“紅旗報”の編集者を歴任した。抗日戦争と解放戦争の時期に馮乃超同志は周恩来同志と中国共産党南方局の直接の指導のもとで、広範に知識界の人を団結させ、党の統一戦線と文化宣伝のためにすぐれた仕事をした。国民政府軍事委員会政治部第三庁の中共特別支部書記、中共中央南方局文化工作委員会委員、重慶国共談判中共代表團顧問、中共華南分局文化工作委員会書記を歴任した。北平の解放後、華北人民政府教育委員会委員、第一期全国政治協商会議代表、中華全国芸術工作者代表大会代表資格審査委員会副主任を歴任した。中華人民共和国成立以降、中央人民政府政務院文化教育委員会副秘書長、中央直屬党委員会文教分党委員会書記、中央人事部副部長、中山大学党委員会第一書記、副学長、中央広東省委員会委員、中央広東省高等学校党委員会第一書記、北京図書館顧問を担当した。馮乃超同志はかつて第一期全国人民代表大会代表、中国共産党第八回代表大会代表、広東省政治協商会議副主席、第四期・第五期全国政治協商会議委員、第一期・第四期中国文学芸術界連合会全国委員会委員に選ばれた。

馮乃超同志は我党の長年試練を経てきた共産主義の古参戦士であった。大革命が失敗した後、彼は日本における東京帝国大学の卒業試験を放棄し、敢然と帰国し、革命の仕事に参加し、熱心に各歴史時期の革命に必要な仕事に身を投じた。十年動乱の間、彼は迫害をうけたが断じて屈せず、“左”の誤った路線を断固排除し、これに抵抗し反対した。五十余年にわたり馮乃超同志は一貫して党の利益を重んじ、忠節を変えず、立場を確固とし、率直で私心がなく、功に甘んじることなく、仕事に没頭し、真面目で責任を持ち、共産党員の優秀な品質を表している。彼は長年の革命闘争のなかで真剣に党の方針と政策を貫徹し、同志と団結し、刻苦勉励し、中国革命事業や文化教育事業のために重大な貢献をなした。

馮乃超同志は長年病を患ったが、革命の意思は強固であった。彼は真心から党の第十一期中央委員会第三回全体会議以来の路線、方針、政策を支持し、国家の四つの現代化の建設事業に最後の息をひきとるまで関心を持ち続けた。彼は生前に葬儀は簡素に、追悼会を開かぬよう遺言した。

ここに訃告する。

馮乃超同志葬儀委員会 一九八三年九月二十日

忆何林

朱维之

我和何林同志为君子之交共三十六年。1952年全国高等院校调整时，我和何林同志都被调到南开大学中文系来。他从北京来，比我早到两个多月，是系主任。我从上海来，人生地疏，高教部跟我接洽的洪久同志向我介绍了南开的情况，特别提到李何林和李霁野等同志，告诉我，到南开并不会寂寞。民盟中央的同志也向我介绍了何林同志，得知他的爽快直谅的性格。我到校之后，打算第二天就去见何林同志，不料他在当天晚上就先来看我了。听到剥啄一声，我马上去开门，只见一位中等身材，衣冠整齐而精神饱满的同志站在门口。不等我开口，他便自我介绍：“我是李何林”。我们一见如故，谈得很合拍。我把民盟中央同志的话告诉他，他知道我也是民主同盟的成员时，十分高兴，觉得多一层同志的关系，当能更好到地合作。他的话干净利落，把中文系的简史、师资情况、课程设置等情况介绍之后，很快就谈到我的具体工作，依照我的愿望，作了妥善的安排。这一简短的会见，便显示他的性格和为人，没有架子，没有官僚主义，没有虚伪的客套，对人真诚，办事利落，说话不噜苏而讲求工作效率。

我未到北方来之前，在上海早就知道李何林这个名字，主要是由于他的著作《近二十年中国文艺思潮论》（1940年，生活书店出版）。此书之所以能引起我的兴趣，是因为跟我有同好。1926-1927年之间，我还是学生的时代，曾写了一篇《十年来的中国文学》发表在上海《青年进步》月刊的创刊十周年纪念专号上，虽很幼稚，也可算是我国新文学运动最早的历史性总结的文献之一。1939年，我发表了《中国文艺思潮史略》（先后由长风书店和开明书店出版），虽不够成熟，详尽，但也算是最早专论我国文艺思潮史的专著之一。在1940年以后，见到何林同志的这本辉煌巨著，觉得分外高兴，引为同好：一、都做过新文学运动历史小结的工作；二、都注意到文艺思潮史的发展。不过他和我的侧重点不同，他侧重在政治社会的变迁和文学思想的斗争史等文学外部的研究；我所侧重的是创作方法和风格等文学内部的研究。

其次，关于古典、浪漫、现实等流派或主义在中国近代发生与变迁的时间，我们之间也有不同的看法。他认为欧洲从十八世纪以来二三百年来文艺思潮变迁，都反映在我国“五四”以后的二十年中，但有程度和性质的不同。我却认为：宋元以来是我国资本主义因素发芽而缓慢生长的时期，这些思潮在中国和欧洲的发生、发展，几乎是同步的。从十四世纪，即元末明初，开始盛行古典主义，直到十六世纪的明末，共约二百年。浪漫主义思潮盛行时间较短，只在明清之际，就是十五世纪末到十七世纪初一百多年间风行。现实主义则是从清以来，则从十七世纪至今，将有三百年的历史了。现实主义是世界文学的主要流派，其间又有各种不同的区别，随时间的不同而变化。

关于这些不同看法的问题，在我们共事的三十六年中，该有充分的时间来交换意见，必

要时还可以争论一番。但是，这三十六年的宝贵时间多半花在政治运动、学习、斗争和批判中，连备课的时间都不够，谁还有闲情逸致来重提自己过去的旧作呢？并且为我来南开大学后，第一年参加古典文学教室的教学工作，第二年因为现代文学教研室人手不足，在何林同志的多次劝说下转到现代文学的教学工作，第三年又因教育部的新规定，中文系要添一门“外国文学”课，我便受托负起这个新的任务，三十四年来一直和外国文学打交道。况且，我们这些解放前出版的旧作在大陆上都停止印行了；在“文革”中，我们同受打击，只有受批判的份，哪有讨论的份？

在拨乱反正以后，何林同志的《今二十年中国文艺思潮论》于1981年在西安重新出版了，我的《中国文艺思潮史略》也于1978年被香港青年出版社原版重印。据读者反映，说是有启发性，只嫌太简略了，希望能充实些。于是我在1985-1986年间抽空把它重写一过，字数增加了三倍半。1988年由南开大学出版社出版；正可与何林同志详细商讨时，他却撒手去了，真是遗憾。

回忆过去三十六年中，我曾和何林在同一教研组，一同上课，互相听课，互提意见；一同学习、讨论、一同下乡搞“四清”，同吃、同住、同劳动，一同指导可爱的农村小青年们学写文章，一同受“四人帮”的打击、迫害，一同打扫厕所，一同下乡接受贫下中农的再教育。我亲眼看见他在工作中的表现的直爽的性格，亲眼看见他如何对系里行政事务的负责认真，对同事们的生活、学习、思想等各方面的关怀，也看见他如何争取入党，如何作思想上的斗争。处处表现他的认真、爽直性格，甚至在患难中也保持这个可贵的性格。例如在学生宿舍里打扫厕所时，他也一丝不苟地把积垢很厚的便池擦洗得洁白精光，有些便池变得全黑了，积垢非用刀刮不掉，我们又不许身带刀子，他便用指甲去抠，把黑便池抠白之后，还加以欣赏。在这个情况之下，他还敢于提出意见，说爱护公物，讲求公共卫生，对每个人都有好处。听见这话的几个学生较为通情达理，他们不做反应，那就是默然承认何林同志的认真爽直。

何林同志去了，他的性格和事业永远留在后一代人的心中。

1989年元宵节

(注)『李何林先生記念集』(北京魯迅博物館編 天津人民出版社1996年4月)所載。